

おはようございます。今朝は、このようにしてみことばを語る機会を与えられ、主に感謝しています。クロスウェイ教会の日語牧師となり、すでに7年目を迎えました。普段、長老やスタッフの一人としてご奉仕させていただいているので、日本語だけでなく、いろんな方との交わりをもたせていただくことができ、家族共に喜んでいきます。ただ、私のことを知らない方もおられると思いますので、簡単に自己紹介をさせていただきます。

私の名前は、玄仁（ヒョン・イン）といいます。普段は、「ヒョン牧師」「ジン牧師」と呼ばれていますが、私は日本の大阪で生まれ育った在日韓国人三世半です。高校卒業後、今住んでいるサンタクラリタのCOCに留学しました。そこで当教会の日語の家庭集會に導かれ、約一年後に、主イエスへの信仰をもつに至りました。1999年の夏に洗礼を受け、その一年半後、COCの卒業と共に、東京聖書学院に入学しました。そして、そこで三年間の学びと韓国ソウルでの9ヶ月間のインターンシップを経て、この教団に加入しました。最初は、アリゾナ州ツーソンで五年半、その後、母教会である当教会に赴任してきて、7年が経とうとしています。

私の両親はクリスチャンではありません。ですから、神学校に対する理解もなかったもので、私は、クロスウェイ教会と教団からの奨学金によって神学校に行くことができました。当時の日本語部の鍵和田牧師と当教会の兄弟姉妹たちの祈りと経済的サポートによって牧師となる訓練を受けることができたのです。そのように必要を満たし、恵みをもって導かれた主に感謝すると共に、皆さんにも感謝しています。

実は私は、もともと読み書きが大の苦手で、人前で話すことなど全くできない者でした。そのため神学校での最初の学期を終えた時点で、「もうダメ。辞めたい」と、鍵和田師に手紙を書いたような者です。その後の話は、長くなるのでしませんが、今日こうして講壇に立っているということは、その時、神学校を辞めなかったということです。ただただ主のあわれみと恵み、としか言いようがありません。それゆえに、この礼拝を通して主の御名だけがあがめられ、主のみことばとすばらしさだけが、皆さんの心に残ることを願います。

今日開いていますテモテへの第二の手紙は、パウロが書いた最後の手紙と言われているもので、その名の通り、直接の受取人は、彼の愛弟子のテモテでした。今朝は、その中でも最後の章を開いていますが、パウロはこのところで、自分が世を去る時が来たこと、つまり、自分の死が近いことを悟っています。ですから、ここに彼自身と主を信じる者たちの救いについて、彼に与えられている確信を書き記しているのです。

8節「今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。…」これが、ローマの獄中で、自分の死の近いことを悟ったパウロが、自分の救いについて与えられていた確信です。「義の栄冠」とは、救いのこと、もっと言うと、救いの完成を意味しています。パウロのこのような確信は、どこから来たのでしょうか？

そのすぐ前の7節で、彼はこう語っています。「私は勇敢に戦い、走るべき道のを走り終え、信仰を守り通しました」。パウロは言います。「私は兵士のように、この世での戦いを勇敢に戦い、アスリートのように、主から与えられたレースを走り終え、ガーディアンのように、自分に与えられた信仰を守り通りした」と。ですから、あとは勝利者に与えられる義の栄冠が、自分のために用意されている、と言うのです。

確かにパウロは、主の福音宣教に最も貢献した人物の一人といえます。彼自身が言うように、彼は誰よりも多く労苦し、誰よりも多くの実を結んだ人です。それゆえに、彼が「私は勇敢に戦い、私は走るべき道のを走り終え、私は信仰を守り通しました」という時、それに意義を唱える人はいないと思います。では、どうですか？パウロは、そのように言うことで、彼自身の正しさや生き方を、救いの根拠としているのでしょうか？これまでの自分の歩みを振り返り、そこに何の後悔もなく、すべてが納得のいくものであったので、当然自分は、義の栄冠を受けるに値すると言っているのでしょうか？もしそうだとしたら、彼は主を誇る者ではなく、自分自身を誇る者です。でも、そうではありません。

パウロがこのように言ったのは、彼にそのような歩みをさせて下さった主イエスを誇るゆえです。つまり、自己中心で、その間違った熱心さのゆえに、かつて神の教会を迫害した罪深い自分を、さばくどころか、かえってあわれみを示すことで、その恵みを語る神の器として立て、その歩みを導かれた主を誇るゆえに、彼はこの

ように語ったのです。「私たちは真実でなくても、彼は常に真実である」(2:13)という真実な主によって彼が導かれたからです。

確かに、勇敢に戦い、その道のりを走り、信仰を守り通したのは、パウロ自身です。でも、それは主の真実さによって、主の計り知れない恵みとあわれみによってであったことを彼自身が一番よく知っていました。ですから、そのすぐ後で、義の栄冠を、自分の力で獲得するものとしてではなく、それは正しい審判者である主によって授けられるものだと言っているパウロは言うのです。それを受けられるかどうかは、この方にかかっていると。

そして、続く8節の後半では、今度は、他の信仰者たちの救いについて、彼の確信を述べています。「私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです」。当然のことですが、パウロは、「義(救い)の栄冠」が、自分だけでなく、すべての信仰者にも授けられることを語っています。そして、この所からも、彼が「勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通した」と言った時、それが彼自身を誇るものではなかったことがわかります。

なぜなら、パウロはここで他の信仰者たちの救いについて、「私のように歩む者には」ではなく、「主の現れを慕っている者には、だれにでも(主が義の栄冠を)授けてくださる」と言っているからです。つまり、私たちクリスチャンをして、勇敢に戦い、走るべき道のりを走り、信仰を守り通そうとするのは、福音を聞き、すでにこの主の十字架の愛を知り、それを信じて救われているからです。主に愛され、主を愛する、という主との愛と信頼の關係に、恵みにより、信仰によって入れられているので、私たちは、そのような兵士として、アスリートとして、ガーディアンとして、義の栄冠を約束された者としての歩みへと進むのです。

いかがですか？主は、ご自身の現れを慕っている者には、だれにでも義の栄冠を授けて下さるといいますが、今日あなたは、主の現れを慕っていますか？この「慕う」とは、「Love」(ギリ語:アガパオ)ですが、主の現れを愛するとは、どういう意味でしょうか？主の現れ、それは再臨のことです。ですから、それは私たちの救いの完成のために、主が再びこの世に戻って来られるのを愛すること、心待ちにするということです。今日あなたは主の現れを心待ちにしていますか？もっといって、あなたは主イエスご自身を愛しておられますか？

私と妻の訓子は、日本出身なので、家族や友達の多くは、日本に住んでいます。先月も家族で訪日しましたが、日本に行く度に、人々との再会、特に親しい友たちとの再会がとても楽しみです。なぜそうなのでしょう？それは私が彼らのことを知っているから、そして、彼らが信頼できる人だとわかっているからです。ですから、私が彼らに会いたいのは、彼らから何かプレゼントを受け取ることや何か願いことを聞いてもらうためではありません。それは彼らとの再会、顔を合わせて時間を共にすることが、喜びそのものだからです。

主イエスとの關係もそのようなものです。いや、主がどんなに親しい友よりもすばらしく、信頼できる方であるゆえに、それらとは比べものにならないくらい、すばらしいというべきでしょう。もちろん主は、私たちの祈りに応えて下さいます。私たちの必要を知って、それを満たして下さいのお方です。でも、それが私たちをして主を慕う一番の理由となっははいけません。私たちが主イエスを慕うのは、主がすばらしい方であり、このお方が私たちを愛して下さいからです。

でもパウロは、ここで主のことを「正しい審判者」と言っています。正しい審判者を慕うというのは、どこか変な感じもしますが、主が正しい審判者であるという時、それは主が、私たちの心とその歩みのすべてをご覧になって、正しくさばかれるお方であるということです。いかがでしょうか？この正しい審判者である方にすべてを知られていて、「私は大丈夫です。義の栄冠を受けられます」と言える人はいますか？主は、人前だけでなく、誰も見ていない時の私たち(あなた)のこともすべて知っておられるのです。

すべての人は、義の栄冠どころか、不義の冠としての滅びの宣告を主から受けるしかありません。でも、だからこそ、神の御子、救い主イエスが来て下さいました。私たちを罪と滅びから救うため、主は私たちの不義を背負い、十字架にかかって身代わりの死を遂げて下さったのです。正しい審判者である方が、私たちのために神様から代わりにさばかれて下さったのです。これが真の愛でなくて何でしょう？十字架の死よりよみがえられた主は、今日もみことばを聞き、ご自分に信頼を置く者、救いの望みをもつ者に、十字架の愛を注いで下さいます。義の栄冠を与えて下さるのです。この主への信仰(信頼)を最後まで守り通そうではありませんか！